

保育者論における実践事例集からの学びの検証

山本 淳子

1. はじめに

(1) 「保育者論」の位置付け

本学の授業科目「保育者論」は幼稚園教諭普通免許状・保育士資格取得のための必須授業である。「保育者論」は、幼稚園教諭免許状取得に関しては文部科学省が示す教職課程コアカリキュラムの「教職の意義及び教員の役割・職務内容(チーム学校運営への対応を含む)」¹⁾を学ぶ講義科目として位置づけられている。教員養成のための教職課程コアカリキュラムは、教育職員免許法及び同法施行規則に基づき、全国すべての大学の教職課程で共通的に修得すべき資質能力を示すものである。各大学においては、教職課程コアカリキュラムの定める内容を学生に修得させたうえで、加えて地域や学校現場のニーズに対応した教育内容や、大学の自主性や独自性を発揮した教育内容を修得させることが求められている²⁾。また、「教職課程コアカリキュラム」の各科目に示す「一般目標」は当該科目を履修することによって学生が習得する資質能力を内容のまとめりごとに示したものであり、「到達目標」は学生が一般目標に到達するために達成すべき個々の基準をあらわしている。表1に示す通り、「一般目標」も「到達目標」は服務上の義務などをはじめとして、職務理解や地域連携等幅広い内容を含むものとなっている³⁾。

本学は幼稚園教諭、保育士資格の両方を取得する養成校である。そのために教育課程コアカリキュラムと保育士養成に関わる教授内容との整合性を量りながらシラバスを構成していくことになる。厚生労働省の保育士資格取得においては、「保育者論」は必修科目として位置づけられ、「保育士養成課程を構成する教科目の目標及び教授内容」⁴⁾では保育の本質・目的に関する科目として位置づけられ、詳細は表2に示す通りである。

また、保育教諭養成課程研究会及び日本保育者養成教育学会においては、幼稚園教諭養成課程と保育士養成課程を併設する際の担当者及びシラバス作成について、令和元年度から実施の幼稚園教諭養成課程の科目と保育士養成課程の教科目の一部を共通に開講するための「保育者論」の目標と内容を、教育・保育を行う人材を養成する観点から一覧表に整理し提示している。両方の学修内容は同等の内容がほとんどであるが、相違点として、保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容の2. 保育士の制度的位置付け、及び3. 保育士の専門性の(1)保育士の資質能力、(2)養護及び教育の一体的展開については「教職課程コアカリキュラム」にはない項目であ

ると下線によって示されている。さらに教職課程コアカリキュラム「教員」の記載と保育士養成課程の「保育士」、「保育者」の文言の違いがあるために、それぞれの用語の概念を考慮してシラバス作成を行うことの留意事項が示されている⁵⁾。

表1. 教職課程コアカリキュラム

<p>教職の意義及び教員の役割・職務内容(チーム学校運営への対応を含む。)</p> <p>全体目標 現代社会における教職の重要性の高まりを背景に、教職の意義、教員の役割・資質能力・職務内容等について身に付け、教職への意欲を高め、さらに適性を判断し、進路選択に資する教職の在り方を理解する。</p> <p>(1) 教職の意義 一般目標 我が国における今日の学校教育や教職の社会的意義を理解する。 到達目標 1) 公教育の目的とその担い手である教員の存在意義を理解している。 2) 進路選択に向け、他の職業との比較を通して、教職の職業的特徴を理解している。</p> <p>(2) 教員の役割 一般目標 教育の動向を踏まえ、今日の教員に求められる役割や資質能力を理解する。 到達目標 1) 教職親の変遷を踏まえ、今日の教員に求められる役割を理解している。 2) 今日の教員に求められる基礎的な資質能力を理解している。</p> <p>(3) 教員の職務内容 一般目標 教員の職務内容の全体像や教員に課せられる服務上・身分上の義務を理解する。 到達目標 1) 幼児、児童及び生徒への指導及び指導以外の校務を含めた教員の職務の全体像を理解している。 2) 教員研修の意義及び制度上の位置付け並びに専門職として適切に職務を遂行するため生涯にわたって学び続けることの必要性を理解している。 3) 教員に課せられる服務上及び身分上の義務及び身分保障を理解している。</p> <p>(4) チーム学校への対応 一般目標 学校の担う役割が拡大・多様化する中で、学校が内外の専門家等と連携・分担して対応する必要性について理解する。 到達目標 1) 校内の教職員や多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、チームとして組織的に諸課題に対応することの重要性を理解している。</p>
--

表2. 保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について

<p>保育の本質・目的に関する科目</p> <p>教科目名 保育者論(講義・2単位)</p> <p>目標 1. 保育者の役割と倫理について理解する。 2. 保育士の制度的な位置づけを理解する。 3. 保育士の専門性について考察し、理解する。 4. 保育者の連携・協働について理解する。 5. 保育者の資質向上とキャリア形成について理解する。</p> <p>内容 1. 保育者の役割と倫理 (1) 役割・職務内容 (2) 倫理 2. 保育士の制度的位置付け (1) 児童福祉法における保育士の定義 (2) 資格・要件 (3) 欠格事由、信用失墜行為及び秘密保持義務等 3. 保育士の専門性 (1) 保育士の資質・能力 (2) 養護及び教育の一体的展開 (3) 家庭との連携と保護者に対する支援 (4) 計画に基づく保育の実践と省察・評価 (5) 保育の質の向上 4. 保育者の連携・協働 (1) 保育における職員間の連携・協働 (2) 専門機関及び専門機関との連携・協働 (3) 地域における自治体や関係機関等との連携・協働 5. 保育者の資質向上とキャリア形成 (1) 資質向上に関する組織的取組 (2) 保育者の専門性の向上とキャリア形成の意義 (3) 組織とリーダーシップ</p>
--

(表1. 2は文部科学省、厚生労働省の資料を基に筆者が一覧に示した)

本学では、上記の「教職課程コアカリキュラム」、「保育士構成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について」に込められた視点を踏まえて、2019年度に学生に公開したシラバス内容を概観すると主に以下の内容である。なお、教職課程における「教員」、保育士養成課程の「保育士」については特に分類の必要のない場合は「保育者」と記す。

- 保育者の職務、役割、制度の理解について
- 保育者の倫理、資質能力の理解と向上について
- 保育における連携、保育者、職員、地域等の連携協働等チームとしての取り組み
- 学び続ける姿勢やキャリア形成の意義

授業ではこれらの内容を『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』及び『幼保連携型教育・保育要領』を踏まえながら、その他適宜資料を用いての講義、課題学習と発表の共有、意見交換、子どもの活動のDVD視聴等を行った。さらに、幼稚園生活の1年間を保護者への園だよりとして発行し、それらを収録した実践記録テキスト『子どもを見守るまなざし12か月』⁽⁷⁾をほぼ毎授業時に継続して読み進め、内容を各自の気づきシートに自由にまとめ、保育活動を整理したり、自分なりの気づきを記録したりする時間を設けた。

(2) 問題の所在 ー学びに求められる事ー

昨今の学校・保育に関わる現場の課題は子どものことだけではなく、その保護者の子育てに関する問題も含めて複雑、多様化している。保育者養成課程において、実践的指導力や課題への対応力の養成は不可欠である。平成 27 年の中央教育審議会答申、「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」では従来、大学では学芸的側面が強調される傾向があり「教職課程は、学芸と実践性の両面を兼ね備えていることが必要とされ、教員養成は常にこの二つの側面を融合することで高い水準の教員を養成する」⁶⁾ことが求められるとの方向性が提言されている。

本学においては「保育者論」は入学直後の 1 年生前期科目であるが、学生は、例えば保育者の役割を理解するという到達目標に向かうために、幼稚園、保育所、認定こども園の子どもの生活や保育者の仕事をどの程度イメージ出来るであろうか。15 回の授業回数でそれを学生本人の進路選択、職務や本人の適性を考える機会に資する程、深めることができるであろうか。学生の保育に関する語りから、例えば中学校・高等学校での職場体験・保育現場でのボランティア経験があることを伺い知ることができる。また高等学校でコース選択をして保育を学んできた学生も見られる。幼いきょうだいと共に生活したり、親戚の幼児が近所に住み比較的良好に関わっていたりするなど、生活圏で保育に関わる場合も考えられる。しかしまったくその様な経験がないと語る学生の方が多く見られる。

2017 年に幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領(以下 17 要領・指針と記す)の改訂がなされた。

保育所保育指針では改訂の背景として、子どもを取り巻く状況の変化について「少子化や核家族化、地域のつながりの希薄化の進行、共働き家庭の増加などを背景に、様々な課題が拡大、顕在化してきた」⁷⁾として、具体的には、子どもが地域で群れて遊ぶことによる自主的な育ちの困難、乳幼児と触れあう経験が乏しいまま親になる、子育てに対する負担感、孤立感等、子育て親世代の問題点の現状を述べている⁸⁾。このことは平成元年度改正告示の幼稚園教育要領解説でも確認され、当時から指摘されていることであり、長年続く子どもを取り巻く現代的な問題状況である⁹⁾。まさにこのような時代背景の中で生まれ育ってきた学生が、未来の保育者として自分自身の経験知をもって子どもの現代的問題状況を克服していかなければならないのである。保育者養成は保育者を志望する学生自身のこのような位置付けの中で行われるということを再認識して、発展させていかなければならない。

問題的状況を克服するための体験的な学びとして、インターンシップや教育実習、また自主的に行う保育ボランティア活動などが位置づけられる。本学においては入学後の 1 年の前期授業としてミラー観察室を備えた保育室で保育環境や園児、保育者の活動を観察する。子どもの園生活に触れること等を目的として、観察実習によって実際の保育を知るきっかけになっている。筆者は実務家教員として、「保育者論」を担当するが、具体的に保育を観察する経験を踏まえて、同じ

セメスターに配置されている観察実習と連携しつつ、学修内容を進めていきたいと考えている。

以上の学生の実態を考慮し、「保育」を体験する手段の一つとして「保育者論」の授業において保育の実践事例を継続して読み進め、それぞれの事例について自分なりに考察を行うこととした。実践事例を通して、保育現場を知る、保育者の保育に向かう心を感じる、保育内容の実際に触れて、学生自身の保育に対する視野を広げたり考え方を深めたりして、そのことが今後の行動に活かされることを期待した。さらにそれを自分なりの記述でシートにまとめ、学生間で発表し合い意見交流をすることで各自の受け止めや視点の違いを感じながら各自の保育観を見つめることを願った。

2. 研究の目的と仮説

本研究は保育の実践記録テキスト『集団の中で子どもはどう成長するのか 子どもを見守るまなざし 12 か月』¹⁰⁾を継続して読み、考察を通して学生が保育の世界に触れ知見を深め、各自の保育者を目指す者としての自己見つけ意欲を高めることを目的とする。実践記録の継続読書によって学生はどのように保育を取り巻く世界を掴むだろうか。先に掲げた「保育者論」のシラバスで示した授業の主な内容は ○保育者の職務、役割、制度の理解について、○保育者の倫理、資質能力の理解と向上について、○保育における連携、保育者、職員、地域等の連携協働等チームとしての取り組み、○学び続ける姿勢やキャリア形成の意義についてである。本研究ではそれぞれについて、実践事例集の継続読書と検討によって、何が理解できたのか、自らの保育者としてのイメージにつながる可能性があるのか、保育者になることを意欲的に捉えることが出来たのか、等どのような効果が得られたのかを検証するものである。そこで仮説を「保育実践記録に継続的に触れることで、保育活動に関わる職務内容を理解し、保育者の心持ちに触れ、保育者を目指す自己に問いかける機会となり得る」として検証し授業方法を評価、考察したいと考えている。学生の本内容についての取り組みは以下の通りである。

表3.『子どもを見守るまなざし12か月』もくじ(4月～7月の抜粋)

<p>4月 新しい年が始まる幼稚園 子ども達を待つ春休み 新年度がスタート 千里の道も一歩から 役員選び 花 友達にはかなわん こだわりは大事 いつでもどこでもわらべうた 年長の笹山漆川遠征</p>	<p>6月 おそろおそろ一歩踏み出す子どもたち きびだんごと『かにむかし』 「旬」を楽しむ バス遠足の“わな” 自然観察会 うんていができたから見て 生活と結びつくわらべうた 雨の日の幼稚園 子どもとの時間はおもしろい うれしい気持ちのおすそわけ</p>
<p>5月 たくさんの緑がお迎え お誕生会 畑の恵み 支え合い、向き合い 見つめてうなずく そらまめ 絵本の読み方 木登り上手と言いしおのこ</p>	<p>7月 七タの竹が立てられほしまつり おてつだい 気付いて、見て、挑む ほしまつり 川遊び 「わたしーわたしたちを学ぶ」 季節や旬を大切に</p>

テキスト『集団の中で子どもはどう成長するのか 子どもを見守るまなざし 12 か月』を毎回の講義時間内の約 20 分程度をかけて通読する。その際、対象月ごとの「保育の気付き」シート(参考資料)に記入し、自由記述も含めて自分なりに気付いた点を記入し、ノートを作成をする。観察実習と同じセメスターであることから、テキストの実践事例、4～7 月分の実践(表 3)に触れることで学生が園生活と関連づけて理解し

やすいと考えた。そのため、各月の事例は、15回の授業で4カ月分を各自のペースで読み進め、内容についての記入シートを配布し、自分なりのノートを作成することを求めた。記入シートでは「私の気付き」「今月の登場絵本」「自然環境」「子どもの活動」「保護者の活動(支援)・環境・行事・他」の項目に関しては整理しやすいように項目を示した。また記述に関しては、自分のノートとして自由に使用してよいこととした。その月ごとにノートは教員に提出し、記述から学生の理解や情報収集の状況を確認することとした。

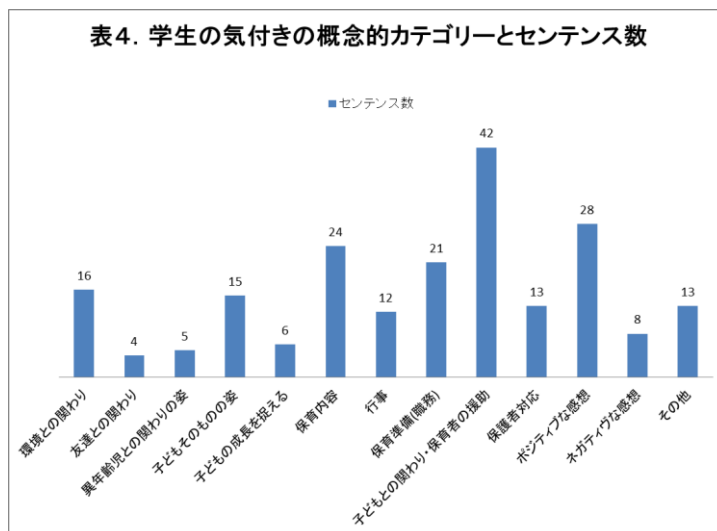
3. 研究方法

本研究では科目「保育者論」の学びの主な内容 ○保育者の職務、役割、制度の理解について、○保育者の倫理、資質能力の理解と向上について、○保育における連携、保育者、職員、地域等の連携協働等チームとしての取り組み、○学び続ける姿勢やキャリア形成の意義について、のそれぞれについて、事例集テキストを通じた学びがいかなるものなのかについて検討するものである。研究方法として佐藤(2008)の『質的データ分析法 原理 方法 実践』⁸⁾の定性的コーディングの手法を参照し、以下の手順で行う¹¹⁾。

1. 同一時間に授業を受けた学生2クラス62人分の作成したノート「4月」の「気付き」の項目の記述についての分析を行う。
2. 記述内容について、一文ずつ文字テキストデータとして使用し、オープンコーディングを行いデータの縮約を行う。
3. その後同じようなテーマはまとめ、または分類できないテーマ等を明らかにしながらさらに焦点的コーディングを行い、概念的カテゴリーコードを見つけていく。
4. 文字テキストデータと概念的カテゴリーコードの比較、複数の文字テキストデータの比較を数回行い分類について検討する。
5. コーディングした学生の気付きを概念的カテゴリーとしてまとめ、カテゴリーの種類、更に文字テキストの文脈から、「保育者論」の授業計画に掲げた主な内容についての、学生の学びを検証する。
6. 倫理的配慮

本シートの活用については、学生の記入シートの研究使用に当たり、個人名を伏せて研究発表の可能性あることを授業中に説明した。使用可否の許可は自由であることを口頭で示し、不可の場合はノートに記載する旨伝えて意向を確認し、研究使用の同意を得た。テキストの著者とは学生の質問等を伝えながら、授業を進めフィードバックしていたが、本研究に当たっては、随時研究結果を報告している。

4. 結果と考察



テキストの4月分の記述について、学生の「気づき」の207センテンスについての分析で見いだされた主な概念カテゴリーの人数を示したものが表4。「学生の気づきの概念的カテゴリーとセンテンス数」である。概念カテゴリーとしては「環境との関わり」「友達との関わり」「異年齢児との関わり」「子どもそのものの姿」「子どもの成長を捉える」「保育内容」「行事」「保育準備(職務)」「子どもとの関わり・保育者の援助」「保護者対応」「ポジティブな感想」「ネガティブな感想」「その他」として分類された。表5。「学生の記述とコーディングの整理(抜粋)」では学生の記述のそれぞれについてオープンコーディング、焦点的コーディングを行い、最終的に概念カテゴリーを見つけて整理したものの抜粋である。

前述したように、「保育者論」のシラバスで示した学ぶべき主な学習内容を、「保育者の職務、役割、制度の理解について」「保育者の倫理、資質能力の理解と向上について」「保育における連携、保育者、職員、地域等の連携協働等チームとしての取り組み」「学び続ける姿勢やキャリア形成の意義について」の主な視点を示した。以下では、これらの視点について、テキストである実践事例集から何が理解できたのか、自らの保育者としてのイメージにつながる可能性があるのか、保育者になることを意欲的に捉えることが出来たのか等、どのような学びが得られたのかを省察し、仮説について検証する。

表5.「学生の記述とコーディングの整理(抜粋)」

番号	概念的カテゴリー	焦点的コーディング	オープンコーディング	テキスト
1	環境との関わり	自然事象に関わる	4月の花を見せる	4月は色々な花が咲くので、子どもたちに見せるのも良いと思いました。
季節に触れる			春という季節だけでも、桜や花が咲いた庭の散策、川のこいのぼりなど季節に子ども達が触れられるものが沢山あるんだと感じた。	
環境による保育		環境による保育	日々の遊びも行事もほとんどが環境と関わっているなと思いました。	
環境に慣れる		新しい環境に慣れる	どんな小さな子どもでも社会人の大人でも新しい環境は苦手な環境で慣れていくのに時間がかかることが改めて分かった。	
5	友達との関わり	友達との関わり	不安な子どものサポート	4月から新しく生活が始まるので、不安な子ばかりだと思っていましたが、すぐにお友達を作って、楽しく過ごすことができる子もいるのだと気付きました。
6			子どもの助け合い	同級生が同級生の面倒を見てたり、助け合ったり、かわいらしいなと強く思った。
7	異年齢児との関わり	異年齢の関わり	年長は年少の見本になっている	年長さんは下の子の見本にならないといけないということがわかっていてかっこいい姿を見せている。
8			異年齢の関わり	年長と年中との関わり（お話をしたりする）が、子どもにとっても良い経験になるんだと知りました。
9	子どもそのものの姿	子どものこだわりの対応	子どもの様子	嫌がる朝があったり、元気がある朝だったり、1日1日の子供たちの様子も違う。
10			泣くのは主張	泣くのはその子だけの主張—一人一人の主張に応えたい。
11		年長児	年長さんは仲の良い友達ができても周りが見えなくなるほどまで行くんだと思った。	
12		大人への信頼感	信頼	大人への信頼感がある。
13	子どもの成長を捉える	子どもは日々成長する	子どもは日に日に慣れてくる	保育園・幼稚園はやはり「集団生活・集団行動」を身に付ける場所。入園してすぐにはできないが、日に日に慣れてできるようになる。門のところで朝の別れも初めは泣いていたが泣かないようになる。
14			人間関係を広げる	子どもは始めは保護者それも母、保護者が一番だったのが祖父祖母など世界を広げていき、近所の人や出会う人に泣かなくなり、集団生活に入っていく中で親友を見つけていく。
15	保育内容	遊びの意味	遊びには意味がある	授業でも習ったけれど、保育者が考えている遊びには1つ2つ意味や、目的があるのだと本を読んでも知ることができた。
16			保育のイメージ	子どもを世話をするイメージを持っていた。
17		集団遊び	沢山の体験	集団ですること、体を動かすことなどたくさん体の部分や脳を使うことをたくさん体験させている。
18		親子のふれあい活動	保護者と一緒の時間	入園してでドキドキしている子ども達が少しでも安心できるように、入園式で保護者と子どもで並んで座ったり、保護者と子どもの時間が遊びなどを通したり、沢山あった。
19	行事	コミュニケーションと行事	コミュニケーションの多い行事が盛り込まれていると思う	そのため、信頼関係を築くため、環境に慣れるために、お花見や遠征など、人のコミュニケーションの機会が多い行事が盛り込まれているように思った。
20			安心感のある行事	入園式
21		行事の大変さ	4月の行事が大変	4月だけでも沢山の行事があって大変そうだなと思いました。でも沢山の工夫があって苦勞の中にも本当に充実した仕事だと思いました。
22		季節の行事	季節の行事	季節によって様々な行事に取り組んでいる。
23		職場の行事	新学期はイベントの時期	4月は新学期なので新入生の歓迎会のようなイベントや入園式が行われる時期です。
24	保育準備(職務)	春休みの保育の準備	保育者は忙しい	4月は卒園や入園の時期で保育者方は忙しいということがわかりました。
25			保育者は春休みも準備	保育者達の保育活動はもう春休みからしっかり始まっていることがわかりました。子ども達が楽しく過ごす環境作りなど沢山することがあります。
26		自分で調べる	一度自分で考える	何でも疑問に思ったことはインターネットで調べるんじゃなくて、一度自分で考えて行動してコツコツ取り組んでいかなければいけないと思った。
27		保護者サポート	コミュニケーション	また子どもだけでなく保護者や他の保育者との関係も大事にしたいといけないので、コミュニケーションが必要だと思った。
28			子ども、保育者、保護者をよく見る	子どものことだけでなく、保育者や保護者の事も書いてあって、周りをよく見てるんだなと思いました。
29			チームとしての保育者	保育者の交流
30		子どもとの関わり・保護者の援助	子どもとの安心と信頼の構築	子ども・保護者との信頼関係
31	保育者は園児を安心させる			入園してきた園児を安心してさせるのも保育者の大事な役割だなと感じました。
32	不安な子どもの対応		子どもは泣く	入園してきた子どもたちの中には保護者の方と別れたくない泣いている子いますが、その子たちに手を掛けて落ち着かせるのは保育者の大切な役割だと知りました。
33			不安な子どもと向き合う	新学期は新しい環境で子ども達が不安で泣き出してしまったり心を開いてもらうには時間がかかり大変だけれどちゃんと子ども達と向き合う。
34	保育の工夫		慣れるように工夫する	私たちは将来保育者になった時、子どもたちが早く新しい生活に慣れるように工夫をしないといけないのだなと思った。
35			保育の工夫	子どもが飽きないような工夫
36	コミュニケーション		子どもとのコミュニケーション	いくら大変でなくても子ども達とのコミュニケーションをちゃんと取る。
37			子どもにわかりやすく伝える	子どもに何か伝えるには具体的に分かりやすく子どもの生活に合っていることが大切と気づきました。
38	子どもの気持ちを読み取る		子どもの気持ちが一番	この本の保育者はいつも子どもの気持ちを一番に考えているのが本当にすごいと思う。
39			いつも子どものことを一番に考える	本を書かれた方や、保育者がいつも子どものことを一番に考えている人だと感じました。
40	子どもに合わせる	子どもに合わせる	私は、「子どもは自然体です。その自然体に合わせていくには時間が必要、手間がかかるのです」というところが心に残った。	
41		保育は時間が必要	子どもは自然体であり、自然体に合わせていくには時間が必要であることを知りました。	
42	子どもと楽しむ	子どもよりそう	自然体である子どもに寄り添って面白い発見がいっぱいそうだなと思った。	
43		子どもと楽しむ	子ども達と過ごす時は、一緒に楽しみながらというのが一番大切なのではないかと感じた。	
44		子どもに提案する	子どもに強制させるのではなく提案する。	
45	子どもとのいろいろな関わり	保育者は臨機応変が大変	臨機応変さもとても大事だと思いました。	
46		子ども自ら道を開く	保育(保護)者は道を開いてあげて、誘導するよりも、子ども自ら道を切り開いていくのがとても良いなと感じた。	
47	保護者対応	保護者支援	4月の保護者サポート	4月は新しい環境に子ども大人も慣れることができるように、サポートすることが大切と思う。
48			保護者の不安対応	保護者の不安もちゃんと取り除いてあげる。
49		保護者支援	子どもだけでなく、その子どもたちを育てるために日々仕事に追われてつい声を荒げそうになるお母さん達に「時にはしんどくなることもあっていいんだよ」と声をかけてあげられるような存在でありたい、とあってとても素敵だなと思いました。	

50	ポジティブな感想	体調管理の大切さ	体調が悪くても絵本を楽しむ	体調が悪くてもずっと咳をしていたのに絵本を読む時には咳が出ないのはすごいことだと思った。私ならきつと咳込んでしまうと思うから体調には気を付けようと思う。
51		保育者としての抱負	嫌と言えないことはいいこと	“嫌でもいい”、“嫌と言えないことはいいことである”と子ども達を理解して、そしてそこからどうプラスに持ち込めるか、という考えにとっても納得できたし、そのように考えられる保育者になりたいと思った。
52			広い視野をもって行動する	私も広い視野を持って行動できるように頑張ろうと思いました。
53			子どもの目線になりたい	子どもたちの目線立場になって考えていきたいと思いました。
54			子どもは大人を見ている	子どもがにどの大人が信頼できるかを考えてみています。なので、私も子ども達に信頼してもらえる保育者になりたいです。
55			山あり谷あり	「山あり谷あり」ではなく、「誰にはなく次の山に登る平地と思う」という部分で、私もそのような気持ちを忘れないようにしようと思った。「谷」と考えるとしんどくなってしまうので。
56			保育は出会いが大切	保育というのは出会いを大事にすることだということがわかりました。
57		保育の出会い	保育で出合いを大切にしたい	保育では子どもたちと生活していく上での出合いを大切にしたいと思いました。
58			自然、まわりの人との関わりは成長に結び付く	子どもの周りにある環境すべてを有益に用いていた。自然だけでなく、保護者・保育者との関わり、年齢が異なる園児同士のやりとり。これらすべてが子どもの成長に必ず結びついていて感じた。
59		楽しそうな保育	行事が楽しそう	行事があるたび「こんなに大笑いしたことはないほどに」涙が出るほど笑いと書かれていて本当に楽しそうだった。
60			活動が楽しそう	毎日のように活動があって、大変だけど楽しそう
61			子育てアドバイス	お母さん達の相談を聞いて、子育てのアドバイスをしたり、子どもの教育以外にもたくさん仕事があって、とても大変だと思うけど、頑張ってるお母さん達に皆から頼りにされる保育者になりたいと思った。そのために自分にできることは何かを考え、行動に移したいと思った。
62		保護者支援	お便りの発行	お便りが詳細に書かれていることで保護者は安心して子どもを園に預けることができると感じました。
63			子育ては時間が必要	インターネットの普及で問いに対して答えがすぐに求められる時代だけど子育ては決してそうではなく時間が必要。一つづつ性格を理解して行こうと思った。
64	ネガティブな感想	読書の不慣れ	本を読む習慣がない	環境や季節に合わせて活動していることはわかったけど、本を読む習慣がなくて難しかった。
65			気が付きが少ない	読む時間をあまり取ることができなかったため、気づきも少なく、内容もしっかりと理解できなかった。次はもっと余裕を持って読めるようにしたい。
66		保育をイメージできない	保育をイメージできない	本を読んでいてあまりわからなかったのが気付きです。
67			経験がないから保護者の気持ちがわからないのでは	子どもを見る、お世話をする立場となっても、例えば私は子どもを産み育てた経験はなく、本当の意味で保護者さんの気持ちを分かっているわけではないのでは
68	その他(感想)	遊び	本気で遊ぶ	本気で遊ぶということは、年をとるにつれてしなくなる、今の私も本気でぶつかったのは、最後はいつだっただろうと考える。
69			大人と一緒に遊べる	上から目線の指示ではなく一緒に味わうなど、大人としてやれることが色々あるところ子どもたちが遊んでいたら、大人たちも一緒に遊んでいるところがあると子ども達にとっても大人達にとっても環境が素敵に思えて嬉しかったです。
70			記録	何日目とか書いていて日記みたいだった。
71		テキストの文章	記録の書き口	喋り口調だった。
72			記録の書き口	保護者に向けた文章だった。

表6.「学生の記述とコーディングの整理－保育内容－」

記号	概念的カテゴリ	焦点的コーディング	オープンコーディング	テキスト
a	保育内容	遊びの意味	遊びには意味がある	授業でも習ったけれど、保育者が考えている遊びには1つ1つ意味や、目的があるのだと本を読んでも知ることができた。
b		保育のイメージ	子どもの世話をイメージを持っていた。	保育という言葉を聞いてと単純に子供の世話をするというイメージばかり持っていたけど保育者が考えて環境や絵本行事などに触れさせる機会を作ってあげることがとても重要だし大変だけど保育者にとっても心に残るものだった。
c		集団遊び	沢山の体験	集団ですること、体を動かすことなどたくさん体の部分や脳を使うことをたくさん体験させている。
d		いろいろな出会い	子どもの生活を広げる	保育は人間関係を始める植物や動物と子どもたちを触れ合わせることで子どもたちの生活を広げていくことができるということに気づきました。
e			出会いで世界が広がる	子ども達を色々なものに合わせさせてもっとも世界を広げていたかな子どもに育てていきたいなと思われました。
f		4月の保育	4月の保育	4月は新しい生活が始まる場でみんな緊張しているからそれを歌や散歩などで気持ちをどう和らげていくかが大切だと思った。
g			子どもは外での活動	4月は暖かくなってきて散歩をしたり、外で遊んだりするのが良いので外での活動が多いと知りました。
h			散歩活動	4月は桜が満開であったり、チューリップが咲いていたり、自然がとてもきれいだから散歩へ行くなど外での活動がたくさんできる時期だと気付いた。
i			4月の新しい環境	また、4月は子ども達、保護者、保育者それぞれが新しい環境での生活を始める時期である。
j			4月は外の行事が多い	4月は、花や虫が増え外に出るとボカボカしているので、外での行事が多かった。
k			保育者は楽しみ方を教える	4月は外でも過ごしやすく、綺麗な環境で園外保育にぴったりな季節だなと思った。入園式があって初めて保護者元を離れて過ごす子供も多中で、保育者はどうやって楽しみ方を教えていけるかが大切だと思った。
l			年齢に合わせた活動	ぼっぼ、さんぼ、はっぱ組と、年齢別に取り組みやお出掛け先が違って、年齢に合わせて考えていることに気付いた。
m			保育者は子どもが楽しめる工夫をしている	子どもがもっと楽しめる工夫を考えているんだなと思いました。
n			体一つで遊ぶ	体ひとつで遊べるもののレパートリーが多い。
o			環境による子どもの成長を見越した指導計画	保育者は環境による子どもの成長を見越した上で、指導計画を立てていることに気付いた。
p			子どもの生活に合わせる	子どもに何かを伝える時は、子どもの生活にあったもの、わかりやすいものが良い。
q			保護者も一緒に楽しむ計画	子ども達も楽しめるのももちろんですが、保護者御さんも一緒に楽しめる行事やプランがあるのがとても良いなと思いました。
r			子どもの生活を広げる	子ども達は毎日が発見だから、その広がりを大きくするの必要。
s			子どもの生活をつくる	保育は、子どもの生活を作っていくものではないのかと感じた。また、集団生活において、新しい仲間などを作り、新しいことに挑戦することの大切さを教えるのではないかなと思った。
t			保護者と一緒の時間	入園してでドキドキしている子ども達があっという間に、入園式で保護者と子どもで並んで座ったり、保護者と子どもの時間が遊びなどを通したり、沢山あった。
u			保護者の参加	私の通っていた園は夕涼みや運動会といった行事でしか保護者の参加する場はなかったのではありませんでしたが普段からお母さんも一緒にわらわら取らなくても保護者は成長を感じられ子どもは保護者もいて嬉しいしすごいと思います。
v			保護者の行事参加	園児だけでなく保護者も行事に参加して一緒に遊んで楽しんでいた。その方が保護者は子どもの成長を見れるし子どもも保護者がいた方が安心なので良いと思った。
w			保護者、子との触れ合いの場	保護者、子のふれあいの場があるので普段家では見れない様子なども見れたりできるのいいなと思いました。
x			保護者、保護者、子ども距離	保護者と子どもと一緒に遊べる時間を保育者が作っていくことで、保育者と保護者との絆も少しずつ縮まっていくんだと思った。

(1) 保育者の職務の多様さの理解

概念的カテゴリーから、「環境との関わり」「友達との関わり」「異年齢児との関わり」「子どもそのものの姿」「子どもの成長を捉える」「保育内容」「行事」「保育準備(職務)」「子どもとの関わり・保育者の援助」「保護者対応」の項目及び学生のそれぞれの記述から本実践事例を通じて保育者としての職務、役割の概ねを捉えている。このことはテキストの実践事例では園生活の日常が描かれていることで園の全体像としてイメージを持ちやすいことからいくつかのカテゴリーが得られたと考えられる。特に「子どもとの関わり・保育者の援助」のカテゴリーについての気付きを記す学生の割合が多かった。これはテキストが保育活動そのものの記述であり、捉えやすかったこと、学生の主な関心は保育者が子どもとどう関わっているか、という事であるためだと推測できる。

テキストの事例から4月、新学期の保育開始の際に、春季の休業中から準備等があること(抜粋分の概念的カテゴリー番号：20-22,24,25以下番号のみで記す)の事例から保育者の職務の発見がなされている。新入園の子どもに見られる不安(32,33)子ども自身の気持ちを汲み取ったり合わせたりするような保育者の具体的な援助の姿を見出している。保育を行うにあたっての心構え(34)等から、新学期の保育者の仕事の様子や子どもとの関わりのある様子を職務として捉える事ができている。またチーム保育に必要な保育者同士のコミュニケーションへの目配り(27)、研修を兼ねて新任保育者の歓迎会が開催(29)等の描写から、保育者集団としてあり様の気付きについても触れられていた。

(2) 保育者の倫理、資質能力の理解と向上についての視点からの気付き

保育者の資質能力の理解では、概念的カテゴリーの「環境とのかかわり」(1-4)、「友達との関わり」(5,6)「異年齢との関わり」(7,8)はものや人との関わりを通して子どもが育つ姿、つまり環境を通して行う教育実践の気付きである。「子どもそのものの姿」(9-12)、「子どもの成長を捉える」(13,14)はいずれも子どもの姿の理解にかかわるものであり、「子どもとの関わり・保育者の援助」(30-46)は保育者の指導・援助にかかわる保育者の資質能力の理解そのものである。また同じカテゴリー(44)、概念的カテゴリー「ポジティブな感想」のオープンコーディング〈子どもの目線になりたい〉(53)は子どもを尊重するような関わりへの気付きと決意であり、子どもに対する人権意識が捉えられる。「子どもとの関わり・保育者の援助」焦点的コーディング[子どもとの安心と信頼の構築]の〈子ども・保護者との信頼関係〉(30)〈保育者は園児を安心させる〉(31)は保育所保育の保育士の専門性として求められるような信頼感と安心に支えられた養護と教育の一体化された保育理解につながる記述である。「保育内容」(15-18)、「行事」(19,20,22)についての気付きは、具体的な活動として展開されている様々な保育内容そのものを捉えている記述である。

(3) 保育における連携、保育者、職員、地域等の連携協働等チームとしての取り組み

焦点的コーディング[保護者サポート](27,28)、概念的カテゴリー「保護者対応」(27,28,47-49)は主に保護者支援の必要性に気付くような記述である。

表4「学生の気付きの概念的カテゴリーとセンテンス数」では概念的カテゴリー「保育内容」についての気付きの記述は24センテンスであった。そのうち5センテンスが保護者と子ども保育者が一体的に触れあう活動についての気付きであった。表6「学生の記述とコーディングの整理ー保育内容ー」は全体の記述の整理から概念的カテゴリー「保育内容」の分類について取りだしたものであるが、5センテンスが[親子ふれあい活動](記号t, u, v, w, x)についての記述であった。そのひとつに「保護者と子どもが一体的に遊べる時間を保育者が作っていくことで、保育者と保護者との絆も少しずつ縮まっていくんだと思った」と保護者と子ども、保育者と保護者の保育の関係を捉えている記述が見られた。以上から園では子育て支援の対象としての保護者との関係を構築するために、保育活動への保護者の参加による連携が図られていることへの学生の気付きが見られる。

また散歩や園外保育の記述から地域資源の活用、地域連携がうかがえる。表5、概念的カテゴリーの「環境との関わり」では表4では16センテンスであった。そのうち、焦点的コーディングの[自然事象に関わる]では元資料では13センテンスの気付きがあった。学生の気付きでは園内の自然に触れる、地域の川にこいのぼりを飾る(2)、散歩で季節の自然に触れる、地域の方と出会う(14)、等の姿に触れられており、園生活に溶け込むように地域との連携がなされていることを読み取っている。「保育準備(職務)」(25、29)では、新学期の姿だけではあるが、保育者集団を捉え、チームとしての取り組みのイメージにつながるような気付きが見られた。

(4) 学び続ける姿勢やキャリア形成の意義の視点から

概念的カテゴリー「ポジティブな感情」では保育者としての抱負(51-55)、自己研さんや体調管理の心構え(26、50)、焦点的コーディング[保育者としての抱負](51)に見られるような、例えば「泣いてもいい」、「嫌と言えることはいいことである」と子ども達を理解して、そしてそこからどうプラスに持ち込めるか、という考えにとても納得できたし、そのように考えられる保育者になりたいと思った。」という前向きな決意とも捉えられる記述があった。子どもの姿に対して今まで感じていた学生なり子ども観、保育の概念を超えて、保育者としていかに子どもを理解し受け入れていくか、そこからどう保育を展開していくか、という保育観の変革と保育者の役割の理解の決意の表れであると捉えられた。焦点的コーディングの[保育の出会い](56-58)では子どもが環境と出会うだけではなく、保育者として取り巻く世界、同僚、保護者等の人との出会いや関わりを捉えている。[保護者支援]ではその方法等の展望(61-63)に、[楽しそうな保育](59、60)では保育者としての保育することの楽しみにも触れ、期待を

育んでいる。

「ネガティブな感想」からは焦点的コーディングの[読書の不慣れ] (64,65)に見られるように本を読むこと自体の経験の少ない学生や家庭や地域で子どもと接することの経験のないことの自覚から[保育をイメージできない] (66,67)という感想が見られた。本検討は初めて保育実践事例のテキストに取り組んだ初回の4月であり、本授業の展開に対して忌憚のない感想であり、反面今後の学生の読み進め方に期待したい。

「その他」では、本事例集が幼稚園の保護者に向けた園活動の1年間を通じた「園だより」によって構成されているため、著者による“語り”のような文章の特徴を学生が捉え、指摘したものである。(70-72)。

最後に遊びについて「本気で遊ぶということは、年をとるにつれてしなくなる、今の私も本気でぶつかったのは、最後はいつだっただろうと考える。」(68)、大人が一緒になって遊ぶことが素敵な環境(69)、等の記述から、学生自身が幼いころに遊んでいたことをイメージしながら、保育者として子どもの遊びをどう捉えてどう関わるべきかを自分に問いかけている。保育者を目指す者としての今後の生活に問い続けていってほしいと思われる記述であった。

5. 総合考察と今後の課題

以下に、「保育者の職務、役割、制度の理解について」「保育者の倫理、資質能力の理解と向上について」「保育における連携、保育者、職員、地域等の連携協働等チームとしての取り組み」「学び続ける姿勢やキャリア形成の意義について」の視点のそれぞれについて、テキストである保育実践事例集から何が理解できたのか、自らの保育者としてのイメージにつながる可能性があるのか、保育者になることを意欲的に捉えることが出来たかの視点でどのような学びが得られたのか省察し、仮説について総合的に検証を行う。

「保育者の職務、役割、制度の理解について」の視点として、(1)保育者の職務の多様さの理解に示したように、学生の気付を整理すると、10の概念カテゴリー「環境との関わり」「友達との関わり」「異年齢児との関わり」「子どもそのものの姿」「子どもの成長を捉える」「保育内容」「行事」「保育準備(職務)」「子どもとの関わり・保育者の援助」「保護者対応」の項目について広く捉えられていることが整理された。これは実際に保育に携わる保育者が心得ておかなければならない役割や職務であるともいえる。学生の記述から実践事例集を通じて保育者としての職務、役割の概要を捉える事ができると考えられた。しかしながら、本研究は4月の記述の読み取りの分析である事から月を読み進めることでさらなる視点の広がりや深まりが期待できる。職務内容としての制度面の位置付け、サービス上の義務などの理論的面については実践事例集では学修しにくい事柄であり、幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育保育要領等での理論の学びと関連付けた理解が必要である。

(2) 保育者の倫理、資質能力の理解と向上についての視点からの気付きでは「環境とのかかわり」「友達との関わり」「異年齢との関わり」などは事例から、環境を通して行う教育に触れる機会になった。「子どもの姿」「子どもの成長を捉える」はいずれも子どもの姿そのものの理解に関わるものであり、「子どもとの関わり・保育者の援助」は保育者の指導・援助の方法や意義の理解に関わる気付きであった。事例からは子どもの気持ちを理解しようとする、子どもの自然体に寄り添う等、子どものありのままを尊重するような保育者の関わりへの気付きが捉えられた。これらは保育における子どもに対する人権意識の一つの現れである。また、特に新学期であるために信頼感と安心に支えられた実践の読み取りが見られた。この点も養護と教育の一体化された保育実践は大切な保育者の資質能力であることへの理解につながった。さらに「保育内容」「行事」気付きは園生活での子どもの体験や活動の広がりを感じてきたと思われる。

(3) 保育における連携、保育者、職員、地域等の連携協働等、チームとしての取り組みについては、主に保護者との連携で支援の対象としての保護者の位置付けと、子どもの保育活動における連携の視点の両方が図られているということが捉えられていた。さらに保育活動において地域の環境を活用する等の姿に触れている。保育者同士の関わりについての実践事例の気付きが見られたが、チームとしての保育活動の取り組みの姿の事例はこの時点では出会っていないのでさらに読み進めて視点を広げることにつながると考えられる。

(4) 学び続ける姿勢やキャリア形成の意義の視点では「ポジティブな感情」のカテゴリーにおいて、保育者としての抱負や心構え、保育に対する明るい展望が見られた。様々な形で保育実践に触れて、積み重ねから自己の保育観を生成していくことを期待したい。「ネガティブな感想」からは読書の不慣れや実践記録の通読では保育をイメージできないという立場が見られた。少数ではあるが、気付きの記述から学生の読書経験の有無がテキスト通読の取り組みの苦手意識を生じさせたことが示唆された。テキストの月を読み進めることで、個々の学生による読書の不得手の克服が今後の指導の課題となる。同時に学生の気付きの記述に注目して学生の心情を捉えていきたい。

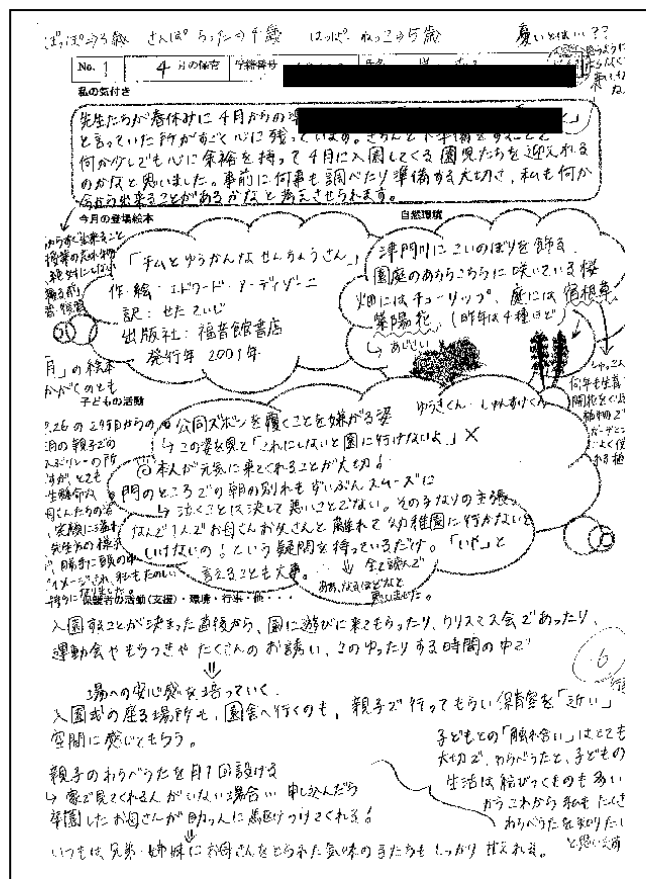
以上の考察から仮説「保育実践記録に継続的に触れることで、保育活動に関わる職務内容を理解し、保育者の心持ちに触れ、保育者を目指す自己に問いかける機会となり得る」は学生の記述を総合するとほぼ確認できたと言える。つまり本授業の実践において、学生は保育者の職務や保育活動を幅広く触れることができたと推測できる。しかしながら「理解する」という深まりはさらなる実践事例の通読によって得られるものであるだろう。また学生の記述やその分析から保育や保育者の心情に触れて実践のイメージを持つことや保育者になることを意欲的に捉える姿が見いだされた。これは著者の心情が言葉として文章で描き出されているために、比較的受け止めやすかったのではないかと考えられた。逆に保育に関する経験の少なさから、

保育者を目指す者として至らない自分の発見の記述もあった。いずれも自己を見つめる機会になったと思われる。

最後に筆者は本実践園の保育を数年観察させていただいた。園では保護者や地域との連携、特に地域の自然環境を取り入れた保育、異年齢児のわらべうたや遊びの伝承等、子どもの生活を中心に時間が流れる保育が実践されていた。少子化や核家族化、地域のつながりの希薄化の進行等、現代の子どもを取り巻く状況によって子どもの育ちの様々な課題が拡大し顕在化してきたと言われる現代である。その保育に当たる新任保育者も生活体験、自然経験が少なく、乳幼児と触れあう経験が乏しい場合が多い。このような状況にあって、連続して実践事例集テキストを通して保育に触れることによる学びは学生が保育者の職務を広く理解するという意味では、有意義な体験であったと言えよう。

本分析は4月分の実践事例の通読を通した個々の気づきを集約した分析である。授業ではこれらを学生にフィードバックするために、4月から7月までの事例からの気づきをグループで共有し、KJ法を用いて構造化することを試みた。グループでの共有と検討についての分析は今後の課題としたいと考えている。

【参考資料：学生の作成したノート例】



引用・参考文献

1)文部科学省 教職課程コアカリキュラム「教職課程コアカリキュラムに関する検討会」2017年、12頁。

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf 2020.10.3、ホームページ。

2)同上, p.2

3)前掲資料、文部科学省 教職課程コアカリキュラム「教職課程コアカリキュラムに関する検討会」、12頁。

4)厚生労働省「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000108972.pdf> 別添1 2020.10.3、ホームページ。

5)保育士養成協議会「保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について」

https://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/29-3s2.pdf

2020.10.3、ホームページ。

6) 前掲資料、文部科学省 教職課程コアカリキュラム「教職課程コアカリキュラムに関する検討会」、1頁。

7)厚生労働省『保育所保育指針解説』フレーベル館、2014年、3頁。

8)同上、3-4頁。

9)大場牧夫他『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、1989年、9-19頁。

10)菅澤順子『集団の中で子どもはどう成長するのか 子どもを見守るまなざし12か月』東京シューレ、2008年。

11) 佐藤郁哉『質的データ分析法』新曜社、2008年、33-42頁。

注

・本論文は「養成校における『保育者論』の授業研究(2)-実践事例からの学生の学び-」として日本保育学会第73回大会(近畿ブロック・コロナ感染症対策のため未開催)において、園田学園女子大学 田窪玲子氏と連名で研究発表業績として承認されたものを加筆、再構成したものである。

謝辞

・保育者養成について、議論を重ねながら共同研究に取り組んだ園田学園女子大学助教 田窪玲子先生、学生に学びを提供いただいた実践事例をまとめられました著者の菅澤順子先生に感謝致します。

・入学直後からの本授業に真摯に向き合い、自分なりの考察によって、ノートを作成し、授業研究資料として提供してくれた受講学生にお礼を申し上げます。ありがとうございました。